

遠軽町

8345 山村 雄一郎

1.概要

1.1 地名

遠軽の地名はアイヌ語の「インガルシ＝（瞰望岩山上より）物見のことをいえり」の転化したものであるが次の三者はそれぞれの専門的な立場で「インガルシ」を次のように解釈している。

- ・永田方正著「北海道蝦夷語地名解」には、インガルシ＝臨眺するところ、この山上のぼれば諸方を眺めることのできるところなり、とある
- ・知里真志保博士「北海道大学」はインガルシペ＝見張りするところ、と解釈している。
- ・松浦武四郎は安政 5 年、湧別川をさかのぼり遠軽近郊でアイヌからの聞き取り（戊午ユウベツ日誌）の結果、インカルシ＝眺望するよしなし……と訳している。瞰望岩は、その昔アイヌ民族の古戦場であり、また神祭の行われた厳粛な場所でもあったと伝えられている。

明治 34 年 2 月、学田地に郵便局が設置されたが、郵便局設置のため現地視察に来た札幌郵便局の上野良夫が 6 号野上駅逦の角谷政衛の案内で瞰望岩に上がった。そのとき「アイヌがここをインガルシと呼び、すばらしい眺めの良いところである。といったことは意義深いことである」と感嘆した。同時に上野氏は局名についてアイヌが呼んだインガルシを漢字の「遠軽」に置き換え「遠軽郵便局」と命名した。やがて遠軽の呼び名は官公庁や学校などで用いられるようになった。このときの遠軽の文字が現在に至る「遠軽の地名の起源」である。

表 1 遠軽町の歴史

1897 年	山形県などから入植して「開基」。
1919 年	紋別郡上湧別村（現上湧別町）から分村、二級町村制、紋別郡遠軽村となる。
1925 年	遠軽村から生田原村が分村。
1934 年	遠軽村が一級町村制、町制施行、遠軽町。
1946 年	遠軽町から丸瀬布村、白滝村が分村。
1953 年	丸瀬布村が町制施行、丸瀬布町となる。
1954 年	生田原村が町制施行、生田原町となる。
2005 年	遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村の 3 町 1 村が対等合併。遠軽町となる。

参考 ウィキペディア

1.2 位置、地勢

遠軽町は、北海道の東北部、網走支庁管内のほぼ中央、内陸側に位置している。北は紋別市・滝上町、東は上湧別町・湧別町・佐呂間町、西は上川町、南は北見市に接しており、東西 47km、南北 46km にわたる緑豊かなまちである。

町を貫流する湧別川の上流側に位置し、支湧別川、武利川、丸瀬布川、瀬戸瀬川、生田原川、社名淵川のほか多数の支流が合流し、そこに広がる肥よくな大地は、開拓当初から農耕地に適した環境として繁栄してきた。

図 1 遠軽町の位置



出典 遠軽町ホームページ

1.3 地形

網走管内を形成する地形は樺太（サハリン）から北海道の北部宗谷岬を経て南東を走る北見山地が天塩と北見の国境にて屋根のような形をつくり、東北方面では、千島火山脈が知床半島から斜里岳などを形成して根室・釧路・十勝の三国と北見との境界に連なっている。一方北東の前面はオホーツク海に面し 292 km 余に及ぶ海岸線に区切られるほぼ三角形の地形を形成している。

遠軽町の地形は北見山地と大雪山系の支脈からなる峰が次第に低くなり湧別川を中にしてその周囲を小山峰が点在する地域に位置している。北部の上湧別町との町境は社名淵川を越え、北西に進むにつれて高さを増し 300m 前後の丘陵を形成し紋別市との境界には 531 m を最高とする高地となっている。西部の丸瀬布町との境界は湧別川を越えると 500 ~ 700 m 前後の連続する小山峰が瀬戸瀬地域に延び、その中には本町最高峰標高 900m 余の瀬戸瀬山も含まれている。生田原町境では 790m を頂点に北東に進んで背谷牛山の 624m からは急に低くなり、野上の六郷山に達している。生田原川を越し東部の湧別町との境界から北東部の上湧別町境にわたっては山頂部がやや平坦に連なっているが、側面は比較的急傾斜を有する地形を示している。これらに囲まれている遠軽の地形はほぼ低地帯であり、遠軽市街地を含む南西に 1 km から 3km の幅を有しながらやや広い平坦地を形成している。

これについて湧別川の支流である社名淵川の流域も小平坦地が見られ、学田墓地から見晴峠を越えて西南部に連続する地域の山頂はほぼ平坦面を形成している。

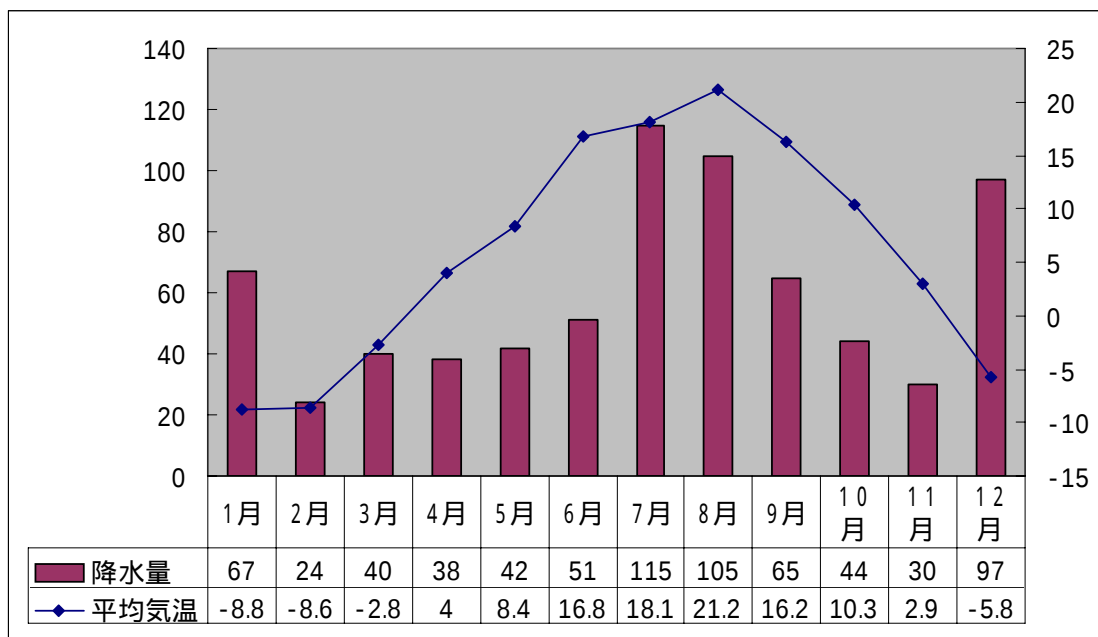
1.4 気象

亜寒帯低湿乾燥地帯に属しているが、まちの北東部が湧別沿岸から 20km しか離れていないため、オホーツク海型気候地域の特色も持っている。梅雨や台風の影響を受けることが少なく、北海道の東北部にありながら、年間を通して温和で暮らしやすいまちである。

5月～9月はオホーツク海高気圧の影響を受け低温となることもあるが、比較的温和である。秋から初冬にかけては、雨量も少なく、晴天乾燥の日が続く。冬は、北西の季節風と流氷の影響を受け、氷点下20度を下回ることも珍しくないが、山地を除くと積雪は比較的少ない。

グラフ1 気象

気温：℃、降水量：mm



データ 遠軽町ホームページ

1.5 町民意識

遠軽町はやがて来る21世紀を展望した「まちづくりの将来像」を計画策定するために、遠軽町町民意識調査（遠軽町第二次総合計画＝平成3年～12年）を実施した。

結果から見ると町民は「福祉・医療・コミュニティを基本としたまち」「工業の誘致・育成を優先したまち」「商店街が整備された買い物の便利なまち」の三点がもっとも関心の高い項目となっている。モノの豊かさに加えて健康志向・本物志向・ふるさと指向など心の豊かさ、ゆとり、安らぎ、うるおい等を求めている結果の現われであると考えられる。

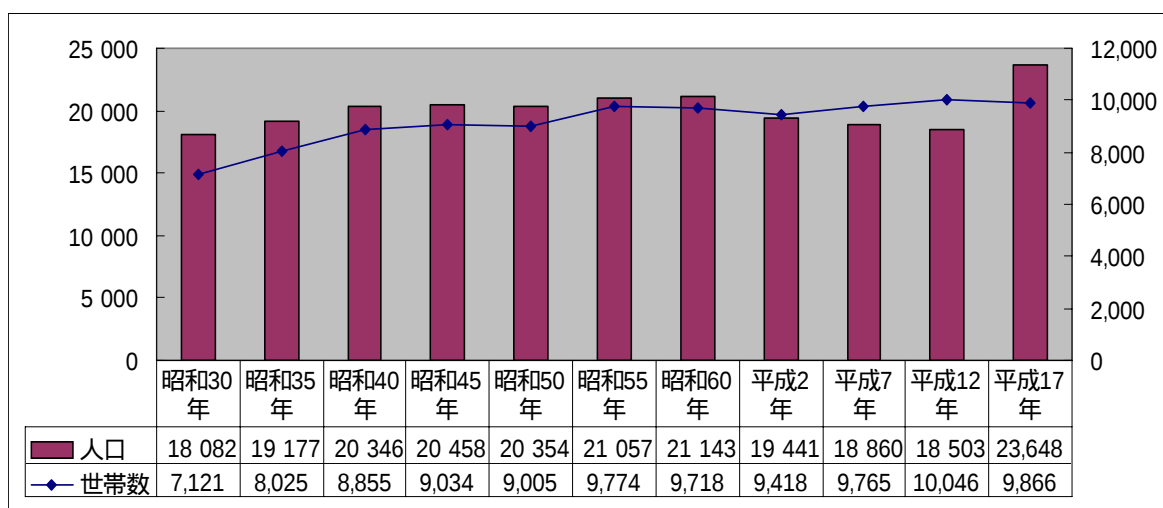
遠軽町は平成9年に「ふるさと遠軽100年」を迎え、そして近づく21世紀を展望した遠軽町の街づくりを考えたとき、住宅・道路・土地・下水道・公園・文化施設などの社会資本の整備に加えて、この地に住む町民一人一人が自ら生きる「豊かさと充実感」の味わえる環境で「楽しく暮らせる」まちづくりをめざしている。

2.人口・世帯数

遠軽町の人口の推移は、行政区域の改変や町の発展などによって、幾度か人口の増減を来してきた。遠軽町は近隣七か町村広域圏の中核の町として、人口も順調な増加をたどり、特に昭和 40 年から 60 年までの数は二万人台に達していたが、それ以降になると社会情勢の変化の中で JR 名寄本線の廃止をはじめ、国鉄分割民営化に伴う職員の広域移動や国鉄機関区の廃止は多数の人員が遠軽の地を離れてしまった。さらに NTT の移転や配置転換、農村における後継者不足による離農、出生率の低下なども人口が減少している主な原因として考えられている。

今後もさらに減少傾向が続くことが予想される。人口を増やし活力ある遠軽町を維持していくためには、地場産業の振興や新たな企業の創出、また生活基盤の充実や公園などの整備を通して快適な生活空間の創造、医療機関の充実など、安心して暮らせる条件整備と施策の取り組みが当面の課題である。

グラフ 2 人口と世帯数の推移（単位：人）



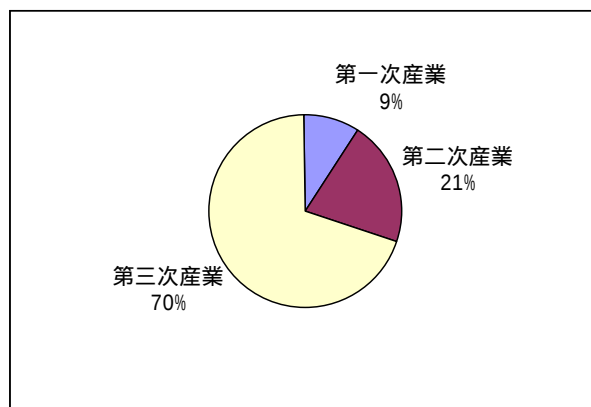
データ 国勢調査

3.産業

3.1 産業別労働者人口

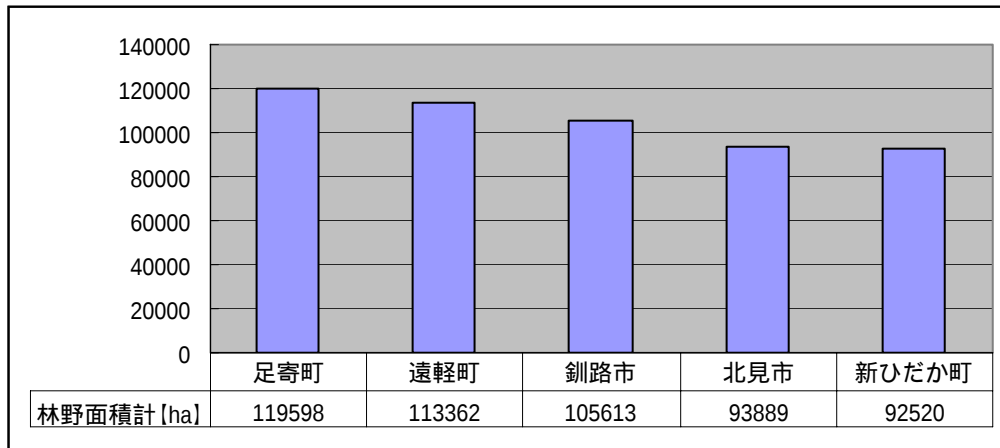
遠軽町は農業と共に豊富な森林資源を生かして林業の町として発展してきた。そのことは今なお林野率が 85%以上あることから推測できる。林業経営体数 167 に対し、家族経営が 143 という点からもその名残が感じられる。さらに平成 17 年には林野面積計が北海道 2 位となっている。

グラフ 3 産業別労働者人口



データ 遠軽町ホームページ

グラフ 4 林業面積計 市町村比較



データ 農林水産省

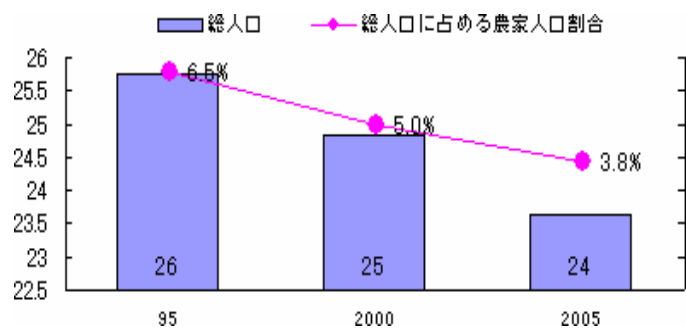
農業においては酪農が中心となっており、農業産出額の実に約 80%を酪農が占めている。作物では飼料作物を多く生産しており、他には小麦、小豆、そば、てんさいなども少量ながら生産している。

しかし、現在は人口の減少や後継者不足、離農が進み、第一次産業が占める割合は 9%しかなく、総人口に占める農家人口割合も 6.6%から 3.8%まで

減少している。また平成 12 年には 750 戸あった林家も平成 17 年には 615 戸まで減っており、今後もこのような傾向が続くと予想される。

第三次産業が 70%を占めることからわかるように現在は観光に力を入れて町興しに取り組んでおり、年々観光客数も増えてきている。

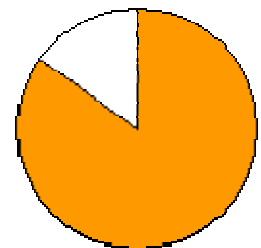
グラフ 5 農家人口割合



データ 農林水産省

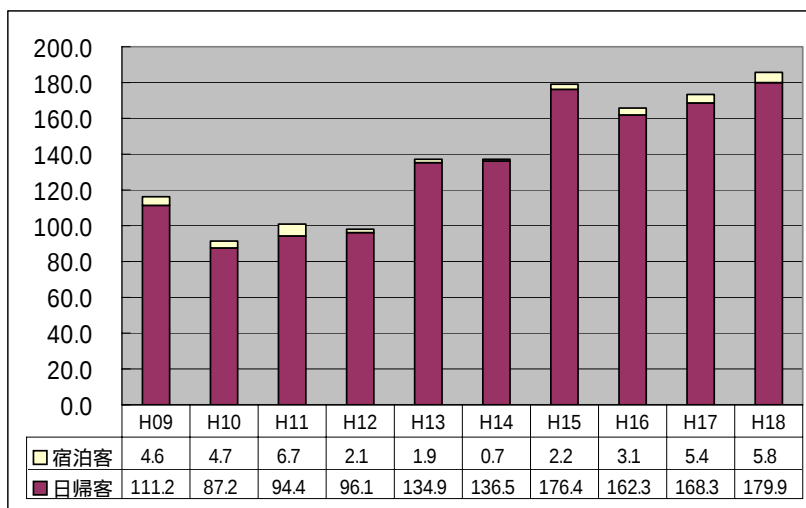
グラフ 6 林野率

85.1%



データ 農林水産省

グラフ 7 観光入り込み客数（単位：千人）



データ 網走支庁ホームページ

4.観光業

4.1 観光に対する取り組み

遠軽町は平成 3 年度「遠軽グリーンプラン 21 = 遠軽町第二次総合計画」を発表した。その中で観光に対する基本構想を打ち出した。今後の街としての観光に有るべき姿と、それに対するめざすべき観光開発の指針である。遠軽町としては地域の特性にあった個性ある施設や場所を早急に整備すること。そして今後はまちづくりのすべての面に置いて第三次産業としての観光性を配慮した取り組みに力を注いでいくことが今後の遠軽町進展のための重要な課題であることをこのプランは強調している。

今日の社会現象から考えられることとして次のようなことがあげられる。

- ・ 高度経済成長の進行に伴う産業のハイテク化や生活水準の向上から一般の生活の中に旅行熱が高まったこと。
- ・ 交通体系である JR 石北本線の高速化・高速バス（遠軽～札幌間）の運行等が旅行熱に拍車を掛けたこと。
- ・ 道路網の整備による自家用車の普及など交通機関の急速な充実
- ・ 週休二日制の定着、労働時間の短縮など余暇時間の拡大

このような社会情勢を背景に国内的にも長期滞在型リゾートの開発や大型レクリエーション基地建設などの計画が相次いで進められている。

元来「観光」という表現は影が薄かった。せいぜい名所地・旧跡地・景勝地などといった言葉でそれらの地域や場所を郷土なり地域の人たちに親しまれてきたに過ぎなかった。しかし時代が進展し、生活的にも平和な時世の社会とともにバカンス・レクリエーション・レジャーなどといった新しい感覚での「観光」が定着してきた。

「遠軽グリーンプラン 21」は「観光」が単なる観光にとどまることなく、観光を今後の遠軽町産業の中核として地域の発展や活性化に結び強めていくために期待をこめた基本構想とした。

図 2 瞰望岩

4.2 観光名所

4.2.1 瞰望岩（がんぼういわ）

町のシンボルで地上からの高さは約 80m。頂上には天文台、休憩所がある。また町のあらゆる所から望むことができる。登る途中の道は大変清々しく、心も体もリフレッシュしてくれる。

かつて湧別アイヌと十勝アイヌが覇権を争ったといわれる古戦場伝説が残る。昭和 50 年代から瞰望岩周辺に太陽の丘えんがる公園が整備された。



出典 ウィキペディア

図 3 太陽の丘えんがる公園

4.2.2 太陽の丘えんがる公園

瞰望岩、カリヨンの鐘が鳴る展望台があり、そこから町を一望することができる。その広大な丘には国内最大級のコスモス園や牧場からキャンプ場、イチゴ園、古代石器等を展示した資料館、子供の国などがあり、様々なレクリエーションが楽しめるようになっている。



出典 えんがる町観光協会

4.2.3 木のおもちゃワールド館「ちゃちゃワールド」

世界約 40 カ国の木のおもちゃを集めたミュージアム。

からくりおもちゃ・あやつりおもちゃ・くるみ割り人形など大小 1 万点もの木のおもちゃを展示・収蔵している。子どもはもちろんのこと大人も童心にかえって楽しめる。

図 4 ちゃちゃワールド



出典 えんがる町観光協会

～参考～

遠軽町ホームページ

<http://engaru.jp/index.html>

えんがる町観光協会

<http://www.engaru-kankou.jp/>

遠軽町の居酒屋がんぼういわ

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~ganbo/engaru.htm>

ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>